情報化社会と宗教

新間智照

遙かな話から始めよう

未来において、人類の思想や宗教（宗教が何らかの形で保持せられていると前提しての話だが）が、大きなショックを受け、再検討を迫られる時点が、幾つかあると、わたくしは想定している。

①人類が地球外に出て行ったとき……太陽系内の内海航路ともいうべき短期間の惑星間旅行でさえ、人間の世界観に大きな変革をもたらすであろうに、まして長期の生活を地球外で送ったり、地球外で生まれ育ったりすれば、その感覚や思想は、かなり異質なものとなるはずである。たとえば地球上と地球外の環境の大きな相違点の一つに、＜重力の差＞がある。地球の重力は＜1G＞であるが、月面都市にしろ、宇宙ステーションにしろ、恒星間宇宙船（亜光速で何十年何百年の旅行）にしろ、大がかりな人工土地や青空ドームは作られても、おそらく、人工重力は½Gくらい（月では⅙G）に設計され、人類は小重力になじみはじめるであろう。地球上では、外界の知覚から、ひいては内界の表象まで、重力感覚――上下垂直方向の力の感覚と結びついているが、地球外では、それがよりゆるやかに、かなり拡散的な十方空間感覚に変化するであろう。この点では大乗仏教は見直されるかも知れない。

②地球人類以外の知的生命に出会ったとき……現代科学の推定によれば、千億個以上の恒星の集りである銀河系宇宙には、地球型惑星（ということは、地球型生命が存在し得る）は数十億個くらいあり、その中に、人類のように知性の進化をとげた生物が、百万に一つとしても数千個の惑星千に一つとすれば数百万の惑星が、それぞれ文明を持っていると考えられる。これらの高度文明他星人との交信接触

は、充分ありうることであり、科学者はすでにその交信法の検討にとりかかっている。（宇宙言語学という分野さえできている。）もし接触したとき、相手の知性が人類よりはるかに高い場合、あたかも〈他方来の菩薩〉に出くわしたごとく、あるいは〈他方ナントカ浄土〉との交通が開けたごとく、その影響するところは、想像を絶するであろう。そのとき、大乗経典や過去の偉大な宗教家は、古典および古典人として、その洞察力・構想力を再評価されるではあろうが、古典ではない現実に生きた宗教家・思想家たちは、他星文化との仲介者となる一部のリーダーを除いては、いちじるしく権威を失墜するであろう。

③異次元世界との交流技術が確立したとき……人間に〈超常能力〉が備わっているらしいこと、世界は単に空疎な三次元空間だけでないらしいこととそういう未知の領域（十九世紀の科学は、その方面の情報を迷蒙扱いしたのだけれど）に向かって、現代の科学は好意的に探索をはじめている。宗教の領域は、今日ではもはや、宗教々団の独占域ではなくなっている。宗教とは（信仰宗教も悟得宗教も）、人間世界を超える異次元・他世界における存在と接触交流することによって、もしくは人称感を伴わぬ高い情報空間と交流することによって、その情報にしたがって生き方を択び実行する〈情報＝実践系〉とでもいうようなものであがる、異次元との接点、つまり情報伝達の第一次媒体（メディア）は、主として霊力のすぐれた人物（最典型は釈尊とキリスト）の脳神経系であった。常人も〈信仰〉や〈祈り〉を通じて伝達のパイプを持つのであるが、〈狭き門〉であり、強力な人間媒体（メディア）には〈値遇すること難し〉であった。それゆえに、教祖から由来する情報を専有するエリート集団として教団が栄えたのである。

未来において、この〈異次元界⇔人間界〉のメカニズムが解明されてゆけば、不安定で稀少な人間媒体に依存しなくても、高度の電子機器、もしくは未知の新しい原理による機器をメデイアとして、いつでも、だれでも、他次元界との交信交流が可能になるだろう。〈異次元界交信TV〉ができるかもしれないし、テレパシーで会話・教育・教化を行える〈テレパシフオン〉が出現するかも知れない。あるいは〈人格改造機〉という名前が悪ければ〈教化カプセル〉というふうのものが作られて、そのカプセルの中に入ると、プログラムにしたがって、あらゆる感覚を刺戟し、心理治療を施し、霊的（サイキック）な波動を加え、人格を洗浄する機器ができるかもしれない（これなど、現段階でも幼稚ながら

作れるもので、筆者の夢想の一つである。）こういう機器によって、大衆は直接宗教情報に接し、〈成仏への道〉が大衆化されるであろう。そのとき、現在のような宗教家の幾人が、そのプログラム管理にたずさわれるだろうか。

新しい時代が始まつている

上来、迂遠な例をあげたのは、他でもない。宗教家は物事を保守的・教条的に見やすいので、もっと巨視的・流動的に眺めてみたら、と思ってあげた例である。

未来を論ずるのは元来、宗教の特質であった。終末観・正像末史観・輪廻転生・個人の未来である死後の問題・成仏と授記、明確な未来像が情報として示されるので、宗教は生きる指針になり得たのである。信仰とは〈未来を択ぶ決断〉ともいえよう。いま二十世紀、宗教家は未来を語らない。そして宗教々団と全く別のところで、着実な未来研究と未来設計が進んでいる。それらは概して優秀なグループで、次の時代のガイドとなるだろう。

「未来論は現代の宗教である」と言った人があるが、それは裏を返せば、「宗教は過去においては強力な未来論であり、まさしく宗教たり得たが、現代ではもはや……」ということであろう。「この混乱の時代を救うものは宗教しかない」という自負は、いまなお宗教家の中に根強く残っているが、しかし、意地悪く言えば、そういう〈救世の宗教〉のイメージは、いわば、実体は消えているのに目の中になおしばらく見えつづける残像のようなものではあるまいか。

新しい精神活動（それをやはり〈宗教〉という名称で呼ぶようになるかもしれないけれど）を必要とする新しい時代が始まっている。前章で、「地球外生活」「異星人と交流」「異次元交流機」など、わざとセンセーショナルな事項をとりあげて、非現実に見えたかもしれないが、じつはこういうものにつながる時代が、すでに始まっているのである。

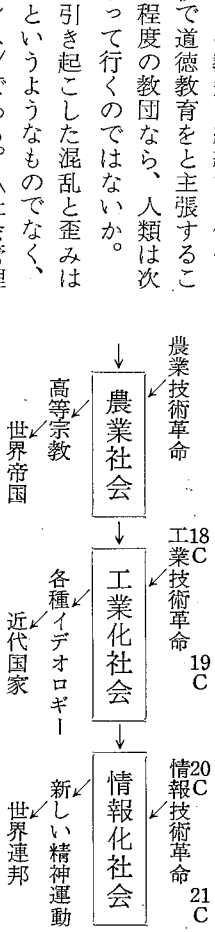
人類文明の発祥より二十世紀までの五千年を、ひとまとめにして〈文明前期〉と呼ぶなら現代以後は〈文明後期〉に入るという、それほど大きな変り目に現代は位置している。よく知られたハラシーの比喩によると、人類の技術進歩をグラフに描いた場合、文明の夜明けより、一九四五年（昭和二十年）までの五千年の進歩を高さ一〇センチメートルとすると、一九四五年より一九六〇年までのわずか十五年間の進歩は、十三階建のビルの高さに匹敵するという。この技術進歩に裏付けられて、新しい時代が始まって

いる――情報化時代、脱工業社会。

宗教家は言う。「技術の進歩は物質文明の進歩であって精神文化がそれに伴わぬアンバランスがある。宗教によらなければ……」と。だが、そういう物心二元平行史観で、宗教家は人類史の何を説明し得たか。現実の社会に何の具体的なプログラムを提示し得たか。宗教々団の提示するプログラムは、ほとんど従来のままの教条と組織で、信仰の強化運動を進めることと、学校で道徳教育をと主張することくらいではなかったか。その程度の教団なら、人類は次第に既成宗教も必要としなくなって行くのではないか。

私見によれば、高度工業化が引き起こした混乱と歪みは〈技術と精神のアンバランス〉というようなものでなく、むしろ〈技術と技術のアンバランス〉である。〈社会管理技術〉とでもいう面がとりわけ遅れているために、社会の歪みが大きくなっている。人類における〈社会制御システム〉は、過去においては〈道徳〉〈宗教〉などが果たした。その過去的発想によれば、なるほど〈技術と精神のアンバランス〉であるが、すでに現代では、社会管理や人間制御は、工学的に把え技術的に操作する対象になりはじめている。この変化――宗教の領域であったものが科学技術に置きかえられてゆく――に対して、宗教家と教団は、あまりにも無関心でいるのではないか。

情報化社会（脱工業社会）というのは、農業社会（生産の主力が農業牧畜）・工業社会（生産主力が工業）に対して、情報産業がふくれあがり、社会活動の中心が情報活動にある社会である。この発展を図示すれば、



何千年の昔、青銅器・鉄器の出現で農耕技術に革命が起り、農業社会が出現した。その余剰力は古代都市を産み、都市は文化を産み、前五世紀、全世界的に精神活動の波が盛り上ったことは、よく知られている。中国では孔子をはじめ諸子百家、インドでは釈尊はじめ各思想家、ユダヤの予言者たち、ギリシャの哲学者たち。そして続く数世紀でその思想や宗教は普遍化し、世界性を帯びはじめ、紀元一世紀ごろ、東に大乗仏教、西にキリスト教などの世界宗教

の成立を見るに至る。すると、その宗教を統一原理として古代帝国が成立するのである（キリスト教とローマ帝国、仏教と漢帝国）。

現代までの宗教は、基本的にはその延長上にある。二千五百年前、および二千年前の二回のピークを持つ精神エネルギーの爆発、情報の飛躍的高密化、いわばその遺産を諸宗教は食べつづけて来たのである。

十八世紀イギリスに始まる産業革命は、工業社会を産みそれから生まれる精神革命は各種のイデオロギーとなり、欧米と日本は近代国家に脱皮する。資本主義は帝国主義国家へ、社会主義は共産主義国家へ、統治形態を実現してゆく。この時代は〈農業→工業→情報〉と並べられる中の一つではあるが、もっと巨視的に見れば、〈文明前期〉より〈文明後期〉へ離陸するための〈滑走期〉と見ることもできる。工業化があってこそ、その果てに情報伝達技術の飛躍的な革命を見、工業社会を脱して情報活動が社会の主流である時代にさしかかっているのである。過去の図式が示すように、やがてその中から、新しい時代に見合った精神革命が生まれねばならないはずである。おそらく一九八〇年代ごろから二十一世紀初頭にかけて、その新しい精神活動の波は形をとりはじめるであろう。それは〈宗教〉と呼べるかどうか。擬似的に言えば、それは〈宗教のハート〉と〈科学の頭脳〉を併せもったような、ある精神運動であろう。そして、それを媒介とし原理として、世界連邦（地球連邦）が実現してゆくであろう。

宗教々団の道

仏教にしてもキリスト教にしても、現在生きているし、これからも生き続けてゆくであろう。しかしそれは、かならずしも時代を動かす主動力の、エネルギーとしてではない。既成の宗教が歴史の主動力であったのは、せいぜい資本主義の勃興期までであったのではないだろうか。ヨーロッパではプロテスタント、日本では法華信仰が主として町人新興階級の思想的支柱になっているが、さきの図式のごとく、文明前期のバックボーンとなる使命は、歴史上終っているように思われる。（宗教のみならず、マルクス主義などの十九世紀イデオロギーも、すでに歴史上の主流である時代は終ったと考えられている。）

宗教々団は今後、どの方向に歩めばよいのか。二つの道が可能であるし、また二つを兼ね備えることが、もっとも望ましいと思う。

一つは、歴史的年齢にしたがって隠居し悠々自適の生活

を送ることであり、一つは、青年に生まれ変って、未来の精神革命に積極的に参加することである。

前者の道は容易であろう。たとえば、能楽や歌舞伎が、古典芸術として保存され、愛好されながら、しかし決して現代演劇の主流や先端でないように、伝統宗教は保存され一部の大衆からは信仰され、他の大衆からは愛好され、伝統の保存にかなり力点をかけて生き続けてゆく。元来、宗教とは古代では独占的情報産業のようなものであったのだから、情報化時代に〈古典〉として生き続けてゆくことは充分できることであろう。

後者の道は困難ではある。現在各教団で遂行されている教団刷新運動は、復古運動的な信仰純粋化運動の傾向にあり、そのこと自身は尊いが、そのままでは来るべき新しい精神革命につながり難い。教団全体があげて青年期に生まれ変ることは、ほとんど望めないと思われる。といって、その運動は、おそらく科学者と技術者だけでは、もちろん達成できるはずもない。各教団は、教団そのままで参加するには、過去の殻が重過ぎるとしても、運動の担い手を輩出する母胎の役は果たすにちがいない。胸に宗教的心情を抱きながら、頭には科学的思考と技術を駆使し得る人物を、どれだけ育て、どれだけ働かせ、そして、どれだけ宗団との連帯の中にとどめておけるか、そのあたりに、二十一世紀に教団の占める位置を決定する鍵がありそうに思われる。